『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第 19 巻　第 4 号　2017年 3 月　123頁～ 134頁

Self-Access Language Learningの有効性について

髙　橋　栄　作

Effectiveness of Self-Access Language Learning

Eisaku TAKAHASHI

要　旨

グローバル化に対応するために、より高い英語力を持った人材の育成が望まれる。学習者の主体的な学修力向上を実現するために、Self-Access Language Learningがあり、いくつかの国内の大学でSelf-Access Learning Centers （SALCs）が提供されている。そこに参加する学習者の学習動機は、統合的動機づけ、または、内発的動機づけにより学修しているとみなすことができるが、学習者の英語習熟度は増すのであろうか。この論文では、SALCs参加者の学習動機と英語習熟度を検討した。高崎経済大学で提供されているSALCsの一つであるEnglish Café参加者の学習動機と英語習熟度を調べた。アンケート結果より、学習者は、統合的動機づけ、または、内発的動機づけにより学修していることが分かったが、英語習熟度について影響は認められなかった。

キーワード:　Self-Access Language Learning、学習動機、好奇心

Summary

In response to globalization, there is a growing need for development of human resources with higher English proficiency. Several universities have already provided Self-Access Language Centers (SALCs) in Japan so that learners can actively improve their language skills. The learners using the center seem to learn languages with integrative or intrinsic motivation. The question is whether SALCs contribute to improvement of proficiency level. This study aims to examine learning motivation of SALCs users and their English proficiency. The author conducted a questionnaire in students who uses English Café, one of the SALCs provided by Takasaki City University of Economics to see the relationship between their learning motivation and English proficiency. The survey results indicated that the students learned with integrative motivation or

intrinsic motivation, but use of the SALCs had no impact on improvement of English proficiency.

Key Words: Self-Access Language Learning, learning motivation, curiosity

Ⅰ．はじめに

2011年「グローバル人材育成戦略」のなかで、グローバル人材の能力水準として次の英語力の継続的な育成の重要性が示された。「業務上の文書・会話レベル」「二者間折衝・交渉レベル」「多数者間折衝・交渉レベル」つまり、これらを実現するには、より一層の英語教育の強化が求められる。また、同年、中央教育審議会 第10回大学分科会大学教育部会で「国際的な動向を踏まえた大学教育の展開について」のなかで、米国等で見られる取り組み、つまり「授業外での課題の設定をシラバスにおいて明確化」することが望ましいとされ、近年、そのような取り組みをおこなっている高等教育機関も多数ある。要するに「学士課程の教育の質的転換」が求められている。また、そのなかで「学生に興味を持たせるなど誘導型の授業、学生の主体的な参加を促す参加型の授業は、それ自体が汎用能力の形成に重要な影響を持つのと同時に、授業外での自主的な学習を喚起し、それが汎用能力に結びつく可能性が高い」としている。このような学習者の学修力向上を実現するために、神田外語大学のSALC（Self-Access Language Center）（図１）や弘前大学のThe English Lounge（図２）などが提供されていると考えられる。SALCsは学習者の英語会話能力などの学修力向上を目的に設立されている。これらは授業外活動であるので、単位取得などをすることはできない。利用状況などを評価されることもない。では、そこを利用する学生の学習（利用）動機はどのようなものであろうか。第二言語・外国語習得の学習動機づけについては、R. Gardner & W. Lambert （1972）がよく知られている。彼らは、学習者の動機づけを「道具的動機づけ」と「統合的動機づけ」に分類した。前者は、「英語を学習することによって、功利的目的を達成したいと思う心理的欲求」のことであり、後者は「英語という言語、英語を母語とする人々、英語母語話者の文化や行動様式などに興味や関心があり、積極的に受け入れ、その集団と一体化したいと思う心理的欲求」のことである。SALCやThe English Loungeの利用者は、自

図１　SALC

図２　The English Lounge

図３　English Café

図４　English Café

ら求め学修していくので、「統合的動機づけ」を持ちSelf-Access Language Learning（以下、SALL）を実践しようとするとみなすことができる。では、SALLを実践すると肝心の英語習熟度は増すのであろうか。そこで、本考察では、高崎経済大学で提供されているSALLの一つEnglish Café （図３、４）（以下EC）の利用者の学習動機と英語習熟度について考察し、ECを利用する動機の違いによって、学習者の英語習熟度に影響があるのか考察する。

Ⅱ．Self-Access Language Learning Center

（１）ECの概要

神田外語大では2001年よりSALCが開設され、弘前大学では2012年よりThe English Loungeがはじめられている。高崎経済大学のECは、2013年後期より試験的に導入され、2014年より現在のスタイルで提供されている。ECは、コーヒーなどを飲みながら、リラックスした雰囲気の中で英語を利用し時事問題、経済・金融問題、音楽や映画といった芸術文化などにおよぶ事柄について英語母語話者・参加者同士が楽しく語り合うことで、グローバル化に対応できる、英語習熟度の高い人材を育成することを目的として実施されている。担当講師は英会話学校より派遣されている。

運営形態

期間：2016 4/12-7/29、2016 9/27-1/27

時間：1：00PM–5：15PM

場所：７号館 ３Fラウンジ

*予約不要・開設時間内自由に出入り可能、参加費は無料である。

2016年度前期の参加者数は、表１の通りである。2015年度と比較すると大幅に利用者が増えたことがわかる。

表１

月	実施回数	参加人数（女子）
4	11回	124（ 46）名
5	13回	133（ 36）名
6	18回	247（ 91）名
7	17回	174（ 58）名
合計	59回	678（231）名

*のべ人数　2015年度４～７月計55回実施参加人数452（178）名

ECは基本的に、コーヒーなどを飲みながらリラックスした雰囲気のなかFree Conversationが実践されるが、担当講師により次のような内容の活動も実践される。

Talk for one minute, Pronunciation, Muscle Training, Rhythm / Intonation / Natural Speech, Learning Vocabulary through Games, Topical Discussion, Basic English, Guided Conversations, Debate, Role Play, Grammar, Pop Songs, etc.

各講師によって実施内容は異なり、2016年度の新しい取り組みとしては、Talk for one minute（指定された時間内で指定された話題について話す）、Muscle Training （母音・子音の発音トレーニング）、Pop Songs （流行の音楽を聴いて、意味や言葉の用いられ方についてディスカッションする）があげられる。Muscle Trainingをはじめ、学習者の発話・発音に特化したプログラムがいくつか提供され、学習者の発話の基礎トレーニングがおこなわれていることがわかる。また、Talk for one minuteやNatural Speech、Topical Discussionなど英語会話の活動としては比較的高度なものが取り入れられている。これらの活動を取り入れられるということは、今年度、学生の英語力が高じた事が推測される。その他には、簡単なテーマによる議論を通して参加学生から英語の発話を引き出している。提供されているプログラムは、創意工夫がうかがわれるもので、担当講師の指導法と指導力は機知に富んで、かつ、非常に高いといえる。

（２）担当講師と参加学生へのアンケート

より良いECのプログラムの提供と改善・要望を参加学生と担当講師から聞くためにアンケートを実施し、その結果を分析する。

（３）アンケート調査の方法

2016年７月11日から29日の間、ECへ参加する前に参加学生は質問紙へ回答した。回答数は

39名であった。

（4）アンケートの詳細

次にいくつかのアンケート項目をまとめて表２に示す[1]。

表２

項　　目		*n*	*M*	*SD*
Ｑ２	ECに対するあなたの姿勢について	39	2.7	0.5
Ｑ３	他の参加者の前で英語を話すことに抵抗を感じますか	39	1.7	0.7
Ｑ５	ECの参加目的にECは役立つと思いますか。	39	2.9	0.2
Q11	後期もECに参加しますか。	39	2.7	0.5

この結果から学生は積極的に参加し、英語を話すことに抵抗はなく、参加目的を達成するのに役立ち､後期も参加しようとしていることが分かる。Ｑ４で「参加目的」を尋ねたが､17名（44%）が「語学留学の準備」のために利用していることが分かった。ECのプログラムとして提供している「日常会話、ディスカッション、ディベート、ゲーム」などに対する効果を４件法で回答してもらったところ（*M*=3.2 ～ 4.0, *SD*=0.0 ～ 1.1）となり総じて学生の評価が高いことが分かった。

Ｑ７では、「ECで学んだこと、力がついたと感じる点」について聞いた。

一部抜粋（原文ママ）

参加者Ａ：スムースに英語が話せるようになった。人前でも緊張しなくなった。

参加者Ｂ：ECに参加する事により、英語が好きになり、英語力がついた。積極的に資格試験を受けるようになった。

参加者Ｃ：英語を話す抵抗がなくなった。

参加者Ｄ：他の学生が英語を流暢に話していることに驚き、自分もそうなりたいという気持ちが大きくなった。

参加者Ｅ：英語が好きになり、人前で話せるようになった。

参加者Ｆ：自信をもって英語を口にし、ジェスチャーなどを使って伝える力が身についた。

参加者Ｇ：会話を続ける力と英語を聞き取る力がついた。

参加者Ｈ：自分が思ったことをある程度英語で伝えられるようになった。

参加者Ｉ：英語がとっさに出るようになった。初対面の人と話す恥ずかしさが無くなった。

参加者Ｊ：誤りを気にすること無く積極的に話せるようになった。

このアンケート結果からECは、参加学生から評価が高く、満足度がかなり高いことが分かる。担当講師によるアンケート結果は以下の通り。

Teacher A: I think the English Cafe has been moving in the right direction, and I expect it will continue to do so.

Teacher B: I think that this year's English Cafe is quite good. The only awkward thing is when the entire table is full and students need to reach over others to get the sign in sheet. If they don't come again, their level will not improve.

Teacher C: I have no major criticisms of the student cafe at this time. I think we should continue to try new things in the student cafe to keep things fresh.

Teacher D: This year's English Cafe is very good.

以上から、参加学生、担当講師共に評価が高く、ECは３年目にして成熟期に入ったと考えることができそうである。

Ⅲ．学習動機と学習

Ⅱで考察したアンケート結果からわかる通り、EC利用者は統合的動機づけにより学修しているということが言えそうである。そこで、これまでに提案されている学習動機とECでおこなわれている学習について整理・分析する。

R. Gardner & W. Lambert（1971）は、第二言語（L2）／外国語習得の動機づけは、道具的動機づけ（instrumental motivation）と統合的動機づけ（integrative motivation）の２種類からなるとする。前者は、功利的目的（例：大学入試）を達成したいと思う心理的欲求のことで、後者は、英語という言語、英語を母語とする人々、英語母語話者の文化や行動様式などに興味関心があり、その集団と一体化したいと思う心理的欲求のことである。

次に、Deci & Ryan （1985）の自己決定理論（Self-Determination Theory）では、学習者の動機の段階を次のように示している。学習者は、「無動機（amotivation）」の状態から、外から押しつけられたり、褒美や罰のような、学習そのもの以外に動機づけられる「外発的動機づけ（extrinsic motivation）」、学習内容そのものに興味・関心が向けられる「内発的動機づけ（intrinsic motivation）」と段階的に進むとしている[2]。

SALLの環境でおこなわれている学習はどのようなものであろうか。Krashen（1982）のモニターモデル（Monitor Model）の「習得・学習仮説（Acquisition-Learning Hypothesis）」では、習得とは他者との自然なコミュニケーションから言語を無意識に身につけることであるとし、学習とは教室で文法指導などを受けて意識的に学ぶものであるとし、この二つは別ものであるとする。

また、「学習した知識」が「習得した知識」に変わることはないという。

Gardner （1979, Dörnyei（2001）の引用による）は、学校教育でのL2もしくは外国語学習は、単なる「教育」や「カリキュラム」の範囲を越え、目標言語話者の文化的遺産をも伝達するものだと主張する。

よって、以上からEC利用者は、Gardner & Lambert（1971）の統合的動機づけ、Deci & Ryan（1985）の内発的動機づけにより英語を学修する。また、その学習動機からKrashen （1982）の習得・学習仮説のいうところの、「他者との自然なコミュニケーション」から言語を身につけているといえ、身につけた英語力はKrashen（1982）の主張する「習得した知識」に近い内容と考えることができる。また、ECでは「教育」や「カリキュラム」の範囲を越え、担当講師である英語母語話者とのやりとりを通じてGardner （1979, Dörnyei（2001）の引用による）の言うところの、文化的遺産をも吸収しているといえる可能性がある[3]。

Ⅳ．英語習熟度

SALCs利用者、SALL実践者の英語習熟度はどのように変化するのであろうか。「統合的動機づけ」や「内発的動機づけ」により、英語を学修している利用者の英語力は高くなっているのであろうか。そこで、EC利用者の英語習熟度を調査するために、英検が開発、コンピュータ上で受験する英語コミュニケーション能力判定テストCASECの結果を分析した。

（1）調査方法

学習者が受検したCASECのテスト1（実施期間4/20-4/24）とテスト2（実施期間7/13-7/17）を分析対象とする[4]。

（2）結果

ECに参加したことがある学生の結果（実験群）と、全く参加したことが無い学生の結果（統制群）を以下に示す。ECは全部で59回実施されたが、利用率10%以上を「EC利用頻度高い群」とした（最高50回利用）。また、長期休暇中に短期の語学留学に参加予定の学生で、英語力が高くない学生は留学前にECの利用を推奨される。この学生らは、いわば、Gardner & Lambert（1971）の「道具的動機づけ（instrumental motivation）」または、Deci & Ryan（1985）の自己決定理論（Self-Determination Theory）の「外発的動機づけ（extrinsic motivation）」によりECに参加したとみなすことができる。そこで、「EC留学のために利用群」とした。最後に、ECを一度利用はしてみるも再利用しなかった学生を「EC利用頻度少ない群」とした。CASECの結果は次の通り[5,6]。

全体

Section 1

テスト	n	平均	標準偏差	t(76)
テスト 1	39	138.38	22.70	0.80
テスト 2	39	143.92	23.31	

Section 2

テスト	n	平均	標準偏差	t(76)
テスト 1	39	129.74	19.88	−0.04
テスト 2	39	130.00	29.64	

Section 3

テスト	n	平均	標準偏差	t(76)
テスト 1	39	139.67	30.55	0.77
テスト 2	39	133.41	25.26	

Section 4

テスト	n	平均	標準偏差	t(76)
テスト 1	39	123.18	20.24	−0.59
テスト 2	39	126.59	19.51	

Total

テスト	n	平均	標準偏差	t(76)
テスト 1	39	530.97	77.66	−0.13
テスト 2	39	533.92	81.06	

TOEIC®換算点

テスト	n	平均	標準偏差	t(76)
テスト 1	39	461.03	107.93	−0.21
テスト 2	39	467.82	106.37	

統制群

Section 1

テスト	n	平均	標準偏差	t(44)
テスト 1	23	121.58	25.12	−0.21
テスト 2	23	124.91	15.91	

Section 1

テスト	n	平均	標準偏差	t(44)
テスト 1	23	115.13	24.85	0.93
テスト 2	23	109.70	17.24	

Section 3

テスト	n	平均	標準偏差	t(44)
テスト 1	23	126.29	24.21	0.64
テスト 2	23	120.26	25.51	

Section 4

テスト	n	平均	標準偏差	t(44)
テスト 1	23	107.54	23.21	−0.24
テスト 2	23	110.13	20.39	

Total

テスト	n	平均	標準偏差	t(44)
テスト 1	23	470.54	74.29	0.39
テスト 2	23	465.00	56.70	

TOEIC®換算点

テスト	n	平均	標準偏差	t(44)
テスト 1	23	387.50	75.00	0.66
テスト 2	23	375.65	51.49	

EC利用頻度高い群

Section 1

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	6	128.00	23.00
テスト 2	6	148.17	23.56

Section 2

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	6	122.33	20.00
テスト 2	6	133.5	28.50

Section 3

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	6	147.83	19.22
テスト 2	6	144.67	17.33

Section 4

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	6	115.67	17.67
テスト 2	6	123.33	21.78

Total

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	6	513.83	70.83
テスト 2	6	549.67	67.11

TOEIC®換算点

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	6	435.83	84.17
テスト 2	6	485.83	80.56

EC留学のため利用群

Section 1

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	8	135.25	14.75
テスト 2	8	150.75	16.69

Section 1

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	8	130.75	9.44
テスト 2	8	134.38	26.53

Section 3

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	8	129.63	34.63
テスト 2	8	130.75	20.56

Section 4

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	8	123.25	13.31
テスト 2	8	134.00	13.25

Total

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	8	518.88	52.63
テスト 2	8	549.88	53.66

TOEIC®換算点

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	8	435.63	64.38
テスト 2	8	478.13	69.84

EC利用頻度少ない群

Section 1

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	16	138.88	23.14
テスト 2	16	131.00	23.25

Section 2

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	16	130.19	23.51
テスト 2	16	121.50	29.88

Section 3

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	16	133.56	30.33
テスト 2	16	128.19	30.69

Section 4

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	16	116.50	22.44
テスト 2	16	123.25	23.88

Total

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	16	519.13	81.53
テスト 2	16	503.94	91.31

TOEIC®換算点

テスト	*n*	平均	標準偏差
テスト 1	16	448.44	115.35
テスト 2	16	435.31	114.77

Ⅴ. 考　察

実験群、統制群共にテスト 1 とテスト 2 の平均値の差に有意差はみられなかった。しかし、実験群と統制群間は、テスト 2 の結果において、F（22, 38）=0.39, p =.02であり、平均値の差は有意であった。その他どの群もテスト 1 とテスト 2 において平均値の差に有意差は無かった。有意差が見られないという結果であるが、それは「学習動機」を考慮すると仕方が無いように思われる。「統合的動機づけ」、「内発的動機づけ」からECを利用しているわけで、第三者がECを利用する事を推奨することはできない。よって、検定力と効果量を満たすサンプル・サイズを集めるのは難しいか、あるいは時間が掛かるように思われる。また、EC参加者の英語習熟度が異なるため比較対照することが難しい。

Ⅵ. 今後の課題

今後の課題は、まず、考察で述べたようにEC利用者の動機づけの観点から、サンプルサイズの飛躍的増加は望めない。次に、EC利用者の41%が一回のみの利用であることが大きな課題である。EC利用者は、情意フィルターが高いにも関わらずECに参加する[7]。またその際、「好奇心

（curiosity）」をもってECに接近する。Gazzaniga（2005, Birdsell（2015）の引用による）は、CuriosityをEpistemic CuriosityとPerceptual Curiosityの二つに分ける。前者は新しい知識を獲得したいと望むことで、後者は、感覚的経験を獲得したいと望むことである。Langevin （1971, Birdsell（2015）の引用による）は、CuriosityをTrait CuriosityとState Curiosityに分ける。前者は、新奇なものやなじみのない状況を探索する個人的な傾向で、後者は、特別な状況について好奇心を持つことである。EC利用者は英語母語話者との英語会話に好奇心があり探索行動から新奇な対象であるECに接近する[8]。情意フィルターが高くてもECに取りあえず参加した利用者や適度なCuriosityを持つEC参加者を「ECを連続的に利用すること」に導けないのは、適切な環境が与えられていないためであると考えられる。最後に、EC利用学生は、「統合的動機づけ」・「内発的動機づけ」を持っているが、それを継続的に保持してはいないということが言える。Dörnyei（2001）は、「動機づけの概して認知的な見解の中でも、我々は驚くほど多くの代替理論や競合理論を目にする」とし、「Wlodkowski （1986, Dörnyei（2001）の引用による）は、動機づけのような広く複雑な仮説的構成概念には、いつも議論の余地があるものだ」としている。さらに、「それらの理論（動機づけの理論：著者加筆）における唯一の問題は、おしなべて他の理論を無視し、多くの場合、他の理論との結合を目指そうとさえしないことにある」という。これらの主張から、動機づけの定義は多々あり、唯一の「動機づけ」から学習者がECへ参加しているとは言えない可能性がある。学習者の動機は、選択的動機づけ（動機の生み出し）、実行動機づけ（動機の維持、保護）、動機づけを高める追観（過去の経験の処理により、将来、意欲的に取り組む）と変化するかもしれない。よって、教授する側は、学習者の学習動機の変化に注意を払う必要があることになる。

（たかはし　えいさく・高崎経済大学地域政策学部准教授）

注

1．Q. 2, 3, 5, 11は３件法による。

2．外発的動機づけの下位区分は、外的なものを取り入れていく内在化が全くない「外的調整（external regulation）」、内在化が進むが自律的でない「取り入れ的調整（introjected regulation）」、内在化が進み自律的段階の「同一化調整（identified regulation）」、内在化が完了する「統合的調整（integrated regulation）」からなる。

3．弘前大学のThe English Loungeは厳密にはSALLとは言えない。なぜならば、Birdsell （2015）に、“Frequent users of the SALC are rewarded with an access code to English learning software（World Engine and EnglishCentral）.”とあり、報酬のために利用していることもあるからである。しかし、ECは報酬は何も無く、強いてあげれば「身につく英語力」が報酬とみなすことができるかもしれない。純粋なSALLであるといえる。

4．効果量と検定力は考慮していない。

5．CASECは、項目応答理論を取り入れたテストで、信頼係数は0.93、問題の構成は、Section 1 「語彙の知識」 Section 2 「表現の知識」 Section 3 「リスニングによる大意把握」 Section 4 「具体情報の聞き取り能力」からなる。各セクションはそれぞれ250満点で合計1000点のテストである。試験時間は平均40 ～ 50分、試験終了後TOEIC®換算点を確認することができる。

6．TOEIC® DATA & ANALYSIS 2016によると大学生のListening & ReadingのIP（Institutional Program、団体特別受験制度）テストの平均スコアは443点である。

7．情意フィルターとは、Krashenの情意フィルター仮説（Affective Filter Hypothesis）により定義され、学習者に強い自信や動機づけがある場合は、情意フィルターが低くなり、その結果、言語習得が上手くいくという。

8．ブリタニカ国際大百科事典（2011）によれば、探索行動（exploratory behavior）とは、経験したことのない新しい刺激や新しい環境に対して注意を向け、接近し、それが何であるかを探ろうとする生体の行動。このような行動は、通例対象

の新奇性が増加するにつれて増大するが、極度に新奇な場合にはむしろ避けられる。

参照文献

Birdsell, B（2015）. Self-Access Learning Centers and the Importance of Being Curious SiSAL Journal Vol. 6, No. 3, pp. 271-285
Deci, E. L. and R. M. Ryan.（1985）. Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior. New York: Plenum.
Dörnyei, Z.（2001）. Motivational Strategies in the Language Classroom. Cambridge: Cambridge University Press.
Gardner, R. C. and W. E. Lambert.（1972）. Attitudes and Motivation in Second Language Learning. Rowley, MA: Newbury House.
グローバル人材育成推進会議（2011）「グローバル人材育成戦略」
Retrieved form: http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf
IIBC（2016）. TOEIC® DATA & ANALYSIS 2016
Krashen, S.（1982）. Principles and Practice in Second Language Acquisition. Oxford: Pergamon.
MEXT（2011）「国際的な動向を踏まえた大学教育の展開について」
Retrieved from MEXT:
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2011/11/08/1312848_2.pdf

参照 Website

English Café: http://www.tcue.ac.jp/college/2213/englishcafe.html
Self- Access Learning Center: http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/facilities/bldg6/salc/
The English Lounge: http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/EL/Welcome.html

参照事典・辞典

英語教育用語辞典　大修館書店
ブリタニカ国際百科事典　小項目電子辞書版　ブリタニカ・ジャパン

オンライン・テスト

CASEC